

シンポジウム 「緘黙症の支援方策を考える

成人当事者の実態を踏まえて

日本特殊教育学会第47回大会 自主シンポジウム59 2009年9月21日

企画者	浜田貴照	(かんもくの会)
	藤田継道	(関西国際大学教育学部)
司会者	藤田継道	(関西国際大学)
話題提供者	宮田裕子	(場面緘黙当事者)
	秋田 実	(成人緘黙症当事者の親)
	川崎淑子	(緘黙児の保護者)
指定討論者	加藤哲文	(上越教育大学 学校教育研究科)

本シンポジウムの企画趣旨

1. 一昨年と昨年の大会においてそれぞれ、準備委員会企画シンポジウム「体験者が語る緘黙症の指導体制を巡る日本の実情」、自主シンポジウム「緘黙症克服への取り組みのために」を開催させていただいた。本シンポジウムはそれらに続くものである。
2. 緘黙症は一般社会には全くと言ってよいほど知られていない。専門家の間でも、緘黙症は子どもの間だけに現れる心理状態で、成長するにつれてあるいは大人になれば解消すると認識されているようである。
3. しかし、実際には、多くの人が成人後にも緘黙症またはその後遺症を抱えている。
4. 昨年は、重篤な緘黙症状を抱える成人当事者の存在を、状態の改善した当事者である話題提供者が間接的に伝えた。その後、成人当事者の保護者会員が増え、彼らの心理面、生活面における問題の深刻さがますます明らかになってきた。
5. 一方で、従来に通念どおり、緘黙症を克服する人たちもいる。しかし、克服の道のりは人によりさまざまであり、小さいうちに自然に症状が解消する人もいるが、とくに高年齢の子や成人後には、意志によって努力して克服してきたという人も多くいる。
6. 緘黙症を克服できた人たちと成人後も症状を抱える人たちの体験を知り、どこに分かれ道があったのかを検証することは、成人や年長の子どもに対する有効な支援策を見出す手がかりになるとともに、軽視されがちな年少の子どもへの支援の手立てを講じる上でも重要であると私たちは考えている。
7. 宮田裕子氏には、小学校入学時から高校まで長く場面緘黙に苦しみ、そこから努力して脱出してきた体験をお話ししていただく。
8. 秋田実氏には、成人後もなお重篤な緘黙症状が継続しているために、社会で自立して生活ができない当事者の実像とそのような人々に対する支援の必要性を保護者の立場でお話ししていただく。
9. このように、緘黙症は人によっては生涯にわたる深刻な問題となる可能性を孕んでいる。
10. しかし、場面緘黙の子は一般的に家庭ではふつうに振舞うので、その姿しか見ていない保護者(家族)に事態をあまり問題視されないことが多いのが現実である。不登校など、目に見える形の問題行動が現れて初めて慌てだすケースが多い。
11. 当会では、当事者と交流して緘黙症の実態をよく知る保護者の多くが我が子の支援に取り組んでいる。昨年は、海外の緘黙児指導書の翻訳書を活用して支援に取り組む二人の保護者の事例を浜田が報告した。今回はそのうちの一人の川崎淑子氏に約1年半にわたる取り組みの成果や困難をお話ししていただく。
12. なお、今回の話題提供者には含まれていないが、一昨年の高校教師、昨年の群馬大学の久田信行先生など、教育関係者からの話題提供は非常に重要である。

上で述べたように、大半の子どもは保護者に心配してもらえない。

子どもの緘黙状態を最もよく知っているのはその状態を毎日直接見ている学校の先生である。したがって、できるだけ多くの緘黙児童生徒を助けるための現実的な方策は、教育関係者に緘黙症の正しい知識をもってもらい、学校で適切な支援を行える体制を整備していただくことである。それは積極的に我が子を助けたいという意欲をもった保護者たちの負担を軽減することにも直接つながる。

話題提供の代わりに、今回配布させていただいた体験記集第3集に担任として緘黙児童に関わった小学校教員の体験記を収めているので、御参考にして学校での支援の在り方を研究していただきたい。